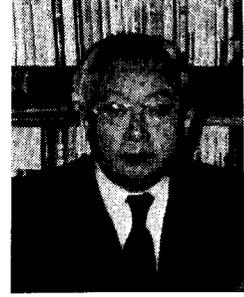


## 新年のご挨拶

会長 近藤 次郎



会員の皆様に心から新年のご挨拶を申し上げます。今年1年皆様ますますご健康で研究や事業の上でよい成果を取られますよう、お祈り申し上げます。

と申しましても、この原稿を書いておりますのは1985年10月のはじめで、正直言ってまだ新年の気分が出ません。そこでノーベル賞のことについて少し考えてみましょう。本日発表になった経済学の賞はアメリカ合衆国マサチューセッツ工科大学の **Franco Modigliani** (モディリアニ、1918-) に決まりました。MITには有名な理論経済学者のサミュエルソンをはじめとして、他の分野でもノーベル賞受賞者が大勢います。しかし、モディリアニほど世界中の経済学者に尊敬され親しみをもって受け入れられる人も珍しいということです。

このノーベル賞受賞学者は小柄で白髪の活気のある男で、頭の毛はくしを入れずにモジャモジャでいつも無造作な服装、忘れっぽくて、教授室は本や新聞、雑誌類が山積しているそうです。助教教授たちは、彼が複雑な問題を非常に早く掌握し、その核心に迫り、誰もが学問的な議論ができるような仮説を打ち立てることがとてもうまいと言っています。モディリアニのもとで博士課程の勉強をしていた院生はほかの先生に出した論文を評価してもらうためにモディリアニの部屋を訪れたところ、直接頭のとっぺんにくるような、非常に正確で興味のある、また洞察力のある批評が返ってきたといいます。その批評は他の先生のそれとは格段の相違があったともいいます。モディリアニは非常に気さくで誰とでも躊躇なく共同研究して一

緒に発想することを進んでやるような人です。

受賞の対象になったのは年金理論というべきもので、消費はその年の収入に比例するのではなくて来年度の収入の予測にもとづいて加減されるというものであります。すなわち来年度の所得が増加するという場合は貯金をはたいてでも欲望を満足するように消費が拡大し、その反対に収入が減ると予測される場合には、消費をおさえて貯金をしていくというものであります。私などはこの9月に長年つとめた国立公害研究所を退職して年金生活に入ったので、この理論は身にしみてよくわかります。このように考えるとモディリアニの理論はきわめて当り前のことで、それがノーベル賞の対象になったというのは、経済学には門外漢の私にとってむしろ驚きであります。

しかしよく考えてみますと、われわれの周辺には深く研究すれば立派な理論に発展するような問題がいくらかでも転がっているように思います。他人が作り上げた理論を勉強して、これにさらに磨きをかけ立派に発展させることも学問の発達のために重要なことですが、大勢やる人がいて競争が大変です。これとは別に、あまり学者が注意を払わない事柄に目をつけて、そこから理論を作り出すようにすれば、それは他の人がやらなかったという意味で必ず独創的なものですから、新理論のパイオニアの栄冠に輝くことになるでしょう。ノーベル賞を得るコツはこんな所にあるのではないのでしょうか。待ち行列、在庫管理でもLPの山登り法でも皆そうです。

もっとも、モディリアニの理論はここまでは簡

単ですが、それを拡大して企業の経営に応用するとなると少しむずかしくなります。経営では当期の利益を最大にするというのが最良の政策ではなくて、その企業の将来の収益に対する期待を反映している株価を最大にしておくような経営方針をとるのが最良ということになります。

フランコ モディリアニは1918年ローマで生まれ現在は67歳、父親は医者で、彼も医学を勉強するように強制されましたが、法律学を修め、1939年ローマ大学から法理論の学位を授与されました。ところが価格統制理論に関する全国論文コンテストに応募して優勝したので、経済学者になるよう審査員からすすめられ、独学で経済学を勉強はじめました。彼はユダヤ人で、ムッソリーニの支配したイタリアを嫌って、1939年に妻とともにニューヨークに移りました。

1940年にマンハッタンにある社会科学のための<sup>ニュースクール</sup>新大学に入学しました。ここはヨーロッパから到着した才能ある人たちの集まるメッカでありました。この大学で第一級のマクロ経済学者のジェコブ マルシャックと出会い多大な影響をうけました。社会科学の学位をとりその後ニュージャージーの女子大学の教職のポストの世話をしてくれたのもマルシャックでした。ここで1年間教えた後、コロンビア大学で3年、再び新大学で6年間、シカゴ大学とイリノイ大学で1年ずつ、ピッツバーグのカーネギーメロン大学に8年間、結局1962年MITに就職することができました。

彼の直観力はすばらしく、さまざまなアイデアを産みだして、常に学生たちとともに勉強するのが好きであったそうです。モディリアニは1985年のノーベル賞を単独で受賞しました。彼の友人たちは少なくともその賞金の一部を妻に与えるべきだと言っていますし、モディリアニもそれに同意しているようです。「彼女は私を軌道にのせるためによく協力した。新しい着想が浮んだ時にはいつでもまず彼女の反応を試してみる。特に貯蓄に関する問題の時には公表する前に彼女の意見を聞く

ことにしている」と言っています。

さて、私は学術会議の会長に選ばれて日本から大勢のノーベル賞受賞者が出るように希望を述べました。これは近頃、科学技術会議などでも提言している「創造性の重視」を、表現を変えて一般の方にわかりやすくしたのに過ぎません。ノーベル賞というのは創造性のシンボルですから、日本が経済的に発展するという企業の努力だけではなく、その根本にある原理を理論化することができればもっと多くの外国からの尊敬を集め、貿易摩擦などということも解消するかもしれません。アメリカではノーベル賞を受けた経済学者が大勢いますが、彼は17年間で13番目です。これはたまたまアメリカ国籍だというだけで、モディリアニのように本来外国人も含まれているからです。日本でもわれわれ自身が努力するとともに、外国からも優秀な頭脳が流入するよう仕向ける必要があるでしょう。バースが打って勝っても阪神が優勝したというのと同じです。

さて1986年はどんな年でしょうか。予測するのはORの重要課題であります。3月には国際経営学会を主催する予定があります。これは1984年11月にIBMの協賛を得て、学習院大学や日本余暇開発センターと共催し、大勢の関心を集めたものの第2回目の会議です。前回と同様オペレーションズリサーチの考え方を普及することに役立てばよいと考えております。昨年出発したAPORSも本格的な活動に入ります。学会もいよいよ国際化の時代に入りました。翌年のアルゼンチンのIFORS、学会創設35周年記念式典に向けての準備もそろそろはじめなければなりません。日本経営工学会、日本品質管理学会との連合シンポジウムをはじめ三学会の協力がいっそう進むことでしょう。同時に経営工学研究連絡委員会を通じて日本学術会議でも会員の意向が学術行政に反映するよう提言してゆきたいと思っています。春の総会で私の任期は終了します。新しい会長を迎えて本学会がいっそう発展することを期待しております。